

新^{しん}年^{ねん}

年の始めをいう。元日といえ、一月一日のことであるが、新春とか新年とかいうことばは、正月というのと同じように用いられる。ただ、正月ということばは、暦の上の一年の最初の月をさすにすぎないが、新春・新年の語は、時を指示するのに加えて、新しい年を迎えた喜び、ういういしい気分のおくらみを伴っている。わが国のことばでいう「あらたまの年」のひびきにも似ていよう。

一年の始まりをどこに設けるかについて、古代の四種の暦はそれぞれに異なっていた。漢の武帝の太初^{たいしよ}元^{えん}（前一〇四）年、太初^{たいしよ}暦^{れき}（夏^か暦^{れき}）が採用され、それが今日の旧暦に至るまで続いている。それ以前には一年の始まりを、顓^{せん}頊^{きよ}暦^{れき}では夏^か暦^{れき}の十月に当たる月に置き、周^{しゅう}暦^{れき}では十一月、殷^{いん}暦^{れき}では十二月に置いていたのである。夏^か暦^{れき}の採用によって、新しい年は新しい春の到来と一致し、新年の喜びは、冬が過ぎて春を迎える喜びと重なることになった。とはいえ、大気はまだ冷たい時節である。まだ柳は芽ぶこうともせず、粉雪の舞う日もある。しかしながら、空の光には確かに明るいものが感じられ、春のきざしははっきり見とられる。中国のような広大な国にあっては、北方と南方の気候を一律に語ることはできないにしても、人々は新年・新春のことばとともに、心のはなやぎ明るむのを覚えたであろう。

歳初、喜皇甫侍御至（歳初、皇甫侍御が至るを喜ぶ）

唐
嚴維

湖上新正逢故人

湖上の新正 故人に逢う

情深應不笑家貧

情深くして応に家の貧なるを笑わざるべし

明朝別後門還掩

明朝 別後 門還た掩わば

脩竹千竿一老身

脩竹 千竿 一老身

○皇甫侍御 皇甫會のことという。侍御史の肩書きをもったことがある。

ここ湖のほとりの地にも正月が訪れ、折しもなつかしい友と出会うことができた。心やさしいあなたであれば、私の貧しい暮らしぶりを笑ったりなさらないだろう。明朝、お別れしたあとでまた門を閉じてしまえば、高い竹林とそれに囲まれた老いたこの身一つがのこるばかり。

わびしい隠棲の日々も、正月の到来、旧友の訪問によってわずかに華やぐ。しかしそれも束の間、再び世間と隔絶した静謐な日常にもどっていく。七言絶句。韻字は人・貧・身。

新年（新年）

宋
蘇軾

曉雨暗人日

曉雨 人日に暗く

春愁連上元

春愁しゅんしゆう 上元じやうげんに連なる

水生挑菜渚

水みづは菜さいを挑とる渚なみさに生しやうじ

煙濕落梅村

煙けむりは梅うめ落おつる村むらを濕うるす

小市人歸盡

小市しょうし 人ひとは歸かへり尽つくし

孤舟鶴踏翻

孤舟こしゆう 鶴つるは踏とは翻はんす

猶堪慰寂寞

猶なお寂寞せきやくを慰なぐさむるに堪たえたり

漁火亂黃昏

漁火ぎよか 黃昏くわこんに乱みだる

○人日 陰曆正月七日。この日の天候が晴れなら幸いがあり、くもりなら災いがあるという。

曆正月十五日。その夜には家々ではちようちんをつけ、町はそれを見る人々でにぎわう。

○上元 陰

明け方からの雨に暗く降りこめられた人日、そこはかとなない春の憂愁はこのまま上元まで続いていく。

つみくさをする渚なみさ

はすっかり帰ってしまい、ぽつんとのこされた小舟の上に鶴が舞いおりたり舞いあがったり無心に繰り返

している。この寂しさの中、せめてもの慰めとなるのは、たそがれの中に揺れ動く漁火の明かり。

晩年の流刑地、惠州（広東省惠州市）で暮かえた正月。六十一歳の政治犯は、もはや人日にも上元にも心が開くことはない。楽しかるべき時節にあつていつそう重く沈む情調が纏綿とするが、それでも宵闇の中の漁火に慰撫を見出すところが、蘇軾らしい。五言律詩。韻字は元・村・翻・昏。

新春（新春）

宋 真山民

餘凍雪纔乾

余凍 雪纔かに乾き

初晴日驟暄

初晴 日驟かに暄かなり

人心新歲月

人心 新歲月

春意舊乾坤

春意 旧乾坤

煙碧柳回色

煙は碧にして柳は色を回し

燒青草返魂

燒は青くして草は魂を返す

東風無厚薄

東風 厚薄無く

隨例到衡門

例に隨いて衡門に到る

○衡門 横木をわたしたただけの門。そまつな家をいう。

余寒が続くうちに雪はようやく消え、空が晴れたとたん、日ざしはたちまち暖かくなる。人々の心を浮き立たせる新しい年がめぐってきて、春の気配が変わらぬ天地に充滿する。柳も元の色にもどって、もはや緑を帯び、草も魂をふきかえして、野焼きのあとが青々と萌える。春風は不公平もなく、いつもの通りこの貧しい家にも入ってきてくれる。

大地に春が拡がっていく喜びを、早春の自然の変化をきめ細かくとらえながら、素直にうたっている。
七言律詩。韻字は乾・喧・坤・魂・門。

新春（新春）

唐姚合

官卑長少事

官卑かんひくくして長つねに事こと少すくなく

縣僻又無城

縣僻けんへきにして又またた城しろ無なし

未曉衝寒起

未いまだ曉あけざるに寒かんを衝つきて起おき

迎春忍病行

春はるを迎むかえて病やまいを忍しのびて行ゆく

樹枝風掉軟

樹枝じゆし風かぜに掉ゆれて軟やわらかく

菜甲土浮輕

菜甲さいこう土つちに浮うかびて輕かろし

最好林閒鶴

最も好し 林間の鶴

今朝足喜聲

今朝 喜聲足る

下役人のこの身にはいつだって仕事もないし、辺鄙なこの町には周囲の城壁もない。夜明け前から酷寒を衝いて起き出し、新春を迎えようと病をおして外へ出る。木々の枝はなやかに風に揺れ、野菜の芽は軽やかに土の上に浮かび出る。何より素晴らしいのは、林の中の鶴、この朝ばかりはめでたい声を存分に張り上げている。

小県の閑職に鬱屈しながらも、早春の装いを呈し始めた自然に心がなごみ、さらに元旦の鶴の声を耳にして、新しい年への期待をふくらませる。五言律詩。韻字は城・行・軽・声。

新年作（新年の作）

唐宋之間

郷心新歲切

郷心 新歲に切に

天畔獨潸然

天畔 独り潸然たり

老至居人下

老い至りて人の下に居り

春歸在客先

春歸りて客の先に在り

嶺猿同旦暮

嶺猿れいえん 旦暮たんぼを同じゆうし

江柳共風煙

江柳かうりゅう 風煙ふうえんを共にす

已似長沙傳

すですに長沙ちやうさの傳ふに似たり

從今又幾年

いまいま從り又た幾年いくねんぞ

○潸然 涙の流れるさま。

○長沙傳 漢の賈誼をさす。讒言ざんげんを受けて長沙王の太傅たふに左遷された。

故郷への思いは新しい年を迎えた今、ことさらに切々と迫り、この天涯の地でひとり涙する。またひとつ年をとって元旦の祝杯の順もいつのまにか人の後ろになり、旅のこの身が帰るより先に春が帰ってきた。山の猿どもと朝も夕もともに過ぎ、川辺の柳と春の風やかすみを分かちあう。長沙の傳ふに流されたかの賈誼にも似たこのありさま、今から以後、さらに何年続くことか。

晩年、欽州きんしゅう（広東省欽県）に流謫りゅうたくされた時の作とされる。節句はしばしば人々の望郷の念をかきたてるが、異土で迎える正月は一層それを痛切にする。若い順に飲む祝いの酒が後にまわったことで老いの到来を思い知り、「帰る」に言葉をかけて春がめぐってきてても帰郷のめどもつかぬ身を嘆く。五言律詩。韻字は然・先・煙・年。